文　化　庁

平成16年度調査研究「伝統文化後継者養成調査」

報　告　書

糸あやつり人形　結城座

平成16年度調査研究「伝統文化後継者養成調査」

索引	P 1
人形遣い養成講座　開講にあたって	P 2
全体の講座計画と目的	P 3
人形授業報告　結城座講師一同	P 4
人形授業報告	P 5
	～
	P 8
日舞授業報告　西川鯉之祐先生	P 9
歌舞伎台詞授業報告　澤村藤十郎先生	P10
義太夫授業報告　竹本素京先生	P11
理論Ⅱ授業報告　菊池明先生	P12
理論Ⅰ報告と人形実技授業まとめ　結城孫三郎先生	P13
	P14
アンケート半期終了時	P15
アンケート全体終了時	P16
授業統括	P17
	～
	P19

人形遣い養成講座　開講にあたって

江戸時代には、江戸を中心にたくさんの糸あやつり人形があったようです。その多くは少人数でグループを組み、それぞれの芸を磨きながら江戸を中心として活動しておりましたが、現在プロとして日本の糸あやつりの伝統を守り演じ続けているのは、唯一結城座のみとなってしまいました。このことは私達にとって大きな誇りでもあり、一方では日々大きくなる不安でもあります。

よりよい後継者を育てていかない限り日本の糸あやつりという貴重な文化が消滅するということです。

私たちは研修システムを改善し、伝統芸能の人材確保に積極的に取り組むべき時期を迎えたと痛感し、昨年9月より平成16年度調査研究「伝統文化後継者養成調査」第一期人形遣い養成講座を開校することとなり、半年間のカリキュラムを終了いたしました。

古典芸能の一つである江戸糸あやつり人形を学ぶには、当然古典一般の知識が必要とされます。そのため、この人形遣い養成講座には私共の主旨に賛同して下さった各界の実力者の方々に講師として参加を願い、それぞれの専門実技を初歩から講義いただきました。基礎的な古典演劇の知識を学ぶ機会を持つことにより、人形遣いの道は今までと違った進歩を得ることができたと確信しております。

今回半年間の調査研究により、伝統芸能を自ら体験学習する者の裾野を広げ、江戸糸あやつりという世界に誇るべき財産を分かち合う人材を得たと感じております。

全体の講座計画と目的

平成16年度調査研究「伝統文化後継者養成調査」として平成16年9月18日～平成17年3月7日に実施いたしました。今回の事業においては古典糸あやつり人形の普及・発展のため、弟子制度や研修生制度によってのみ受け継がれてきた江戸糸あやつりの芸能を一般の方へ裾野を広げ、糸あやつり人形に携わる人材の増加と育成を目的として行われました。今回の第一期江戸糸あやつり人形遣い養成講座には25歳から80歳までの男女全10人が参加しました。

半年間集中的に人形の稽古を行うことで通常の訓練期間の短縮を図り、また古典の芝居を行う上で必要とされる古典的技能（日舞・歌舞伎台詞・義太夫）の基礎の習得、日本の芸能史と糸操り人形の歴史的役割などの理論講義も併せてカリキュラムに組み込み、各分野一流の先生方に徹底して御教授願いました。

１講座2時間月・水・土　週三回（平成16年9月18日～平成17年3月7日）

科目名	講師陣	授業回数
人形実技	結城座人形遣い一同	48回
日本舞踊	西川右近	6回
歌舞伎台詞	澤村藤十郎	6回
義太夫	竹本素京	6回
理論Ⅰ	菊池明	6回
理論Ⅱ	結城孫三郎	6回

人形実技の講座を終えて―講師会議まとめ―

この講座に参加した10人はそれぞれが様々な理由で入学してきた。人形遣いになりたい人、人形や人形芝居が好きな人、伝統芸能全般に興味があり、その入り口として選んだ人など。そこに我々がこの講座を開くことにより一歩踏み出し人形を触る、遣うと進んだのは第一弾の成果ではないか。講座という形で双方が接点を持ち、現在危機的状況にある日本式の糸あやつり人形という、繊細で緻密な表現形態を普及させえたのは素晴らしい結果だ。

今までは結城座に入座を志望してきた研修生への芸の伝承を行ってきた。それが今回の講座のように、必ずしも今後続けていこうという意思のない人たちに継続的な形で教える経験は皆無であり、講師陣全員がそれまでの経験を思い出し、探りながら進めていった。そのことは芸を「盗む」という形で覚えていった自分たちにとっても、とても勉強になった。当初一年を念頭に考えていた基本稽古の目標に対しては3分の1くらいしか到達できなかった。ただ今回の誇るべきこととして一人の脱落者も出ず、逆に生徒さん同士が互いに支えあいながら頑張ってくれたのは予想外のすばらしい成果だった。覚えの遅い、早いは様々ではあるが一人一人が必死に人形と向き合う姿勢は予想以上の熱心さであった。しかし技術をある程度の速度で修得していったとしても、つめこみでは足りない時間的プロセスが必要だと感じる。芸というのはある過程を経て時間をかけて会得しなければ実際に身について行かないものがある。

この半期の間に研修生の3年分のことが学べた。劇団の日常業務の合間を縫って教える、教えられるという方法でなく、主目的としての稽古の機会をもてたことは今までに無かったことである。だが本当に「芝居をする」ということはまだ出来ない。現段階ではまだ「教わる」ことを通して学んでいる段階であり、自主的に「演ずる」「表現する」ことを自分の意志ですることはまだ出来ない。いつまでも　学ぶ・教わる　という姿勢のままでは前進しても授業の間が抜けたり、他の講義が入ったりしただけで、揺り戻しのように後退してしまう。観客のいる場所と違い「稽古場」という場所で教わる段階では失敗しても当然であるがために切実な「痛みの重さ」はまだ生まれて来ない。そしてまた常に教わる姿勢では自主性が生まれて来ない。身に付いたことを教えられたとおりにやるというのは表現者としてはまだまだスタートラインに過ぎない。次の段階ではそれを超えて表現の域に進むことが必要になってくる。この半年という期間の中では自分から考え「どう動きたいのか」「何をしたいのか」という問いかけを持てるようになるための準備段階に過ぎない。芝居作りというのはそこから始まる作業である。

人形実技講座　まとめ

今回の養成講座では当初想定していた1年間ではなく半年間という短期間の調査研究であったため教える内容を絞り込むこととし、人形を遣う上での一番の基本動作である『歩く』を中心に講義し、最終的に「歩いてきて・座って・お辞儀・立ち上がって・去る」という技術を修得することに目標を据えた授業となりました。

9・18～10・27　1～9回目

人形の取り扱い方を学ぶことから始めた（人形は間違った持ち方やかけ方・置き方をすると、糸の調子が狂ってしまう）その後手板（操作板）を正しく持ち人形をまっすぐ立たせ、人形の足の裏が浮かないように、逆に低く持ちすぎて足が曲がってしまわないちょうどの高さに保ちながらその場で足踏みをすることを学ぶ。

その場での足踏みの稽古を徹底しつつ足踏みをしながら前進、自分の周りを円を描くように足踏み、自分の周りを八の字を書きながら足踏み、頭（カシラ）を動かす（下手・上手・正面・※チョイを出す）などの基本訓練を少しずつ進める。授業の最初の頃は緊張と慣れない筋肉を使った動きのためか、貧血で座り込んでしまう生徒さんもいた。

この時点では若い人も年齢の高い人も大体同じ程度の進歩状況で、人形を遣うことに身体が慣れず苦労していた。

※チョイ＝あごを出す、引っ込める糸

11・3～12・1　10～19回目

自分たちで号令をかけながらの足踏みをすることで、声を出しつつ歩くことを学ぶ。人形一体に付き16本ほどあるそれぞれの糸の名称を覚えるため、講師に言われた糸をすばやくとる稽古をする。チョイの糸をきかせながら歩く、手の糸を持ちながら歩く、足を一歩前へ出してそれに後ろ足をひきつけてスックと立つ、反対の足を一歩前に出して後ろ足をひきつけて出すという風にして前進する、など『自然に歩く』ことに近づけるための動きの勉強をする。

また追いかけっこや投げたボールを人形が追いかける等遊びの要素を取り入れた稽古を行う。

それぞれの使い方に癖が出てきたため、フォーム確認や洗い直しのための基本稽古を徹底する。

12・6～12・27　20～27回目

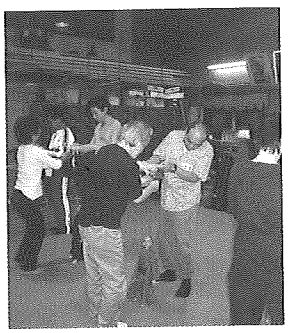
人形の歩きのリズムを感じるため、下座音楽を聴きながら人形を遣う稽古をする。（人形にのめりこみすぎず、リラックス＝脱力　しながら遣う）自分の体と人形の関係（懐の広さや向き等のフォーム）を客観的に見るように意識して遣うということに注意しました。今まで勉強してきた様々な歩きかた（小また、大また、体重移動、小走り、忍び足、足音高く）を応用しながら、高さの違った幾つもの台を越える稽古をする。踏み越える、昇る、降りるなど人形の歩幅、リズム、高さが変わったときの手板の位置について自分で考えて遣うようにする。片足飛び、両足飛びなどを稽古した後、段差を飛び越す稽古をする。人形を座らせる（まっすぐ立った状態から、左足をひねる、右足をひねる、斜め下に糸を引く、手板を下ろし人形の胴は舞台から5mmほど浮かせる）稽古をする。

人形を遣う際に変に力を入れ過ぎた為、生徒さんのひとりが左腕の筋を痛め、一月間ほぼ見学となってしまう。

1・8～1・31　28～36回目

新年最初の授業では時節にあっためでたい獅子舞『寿獅子』の蝶々（一本糸の人形）を一人ずつ遣ってみる。声を出す稽古を始める。喜怒哀楽をこめた「あいうえお」や『口上』や『壺坂霊験記』の観音様のセリフを人形を遣いながら一人ずつ声を出してみる。反対方向から歩いてきた人形同士が出会い、去っていくなどシチュエーションで芝居を作る。泣きながら歩く、笑いながら歩くなど。歩く、走るだけでなく『目線を作る』『座る』『座って立つ』『立てひざ』『飛ぶ』を一連の流れとしての稽古をする。

気負いが減り、力が抜けてきたため意識が全体に廻るようになり、人形がしっかりしてくる。（脚の動き、目線など）



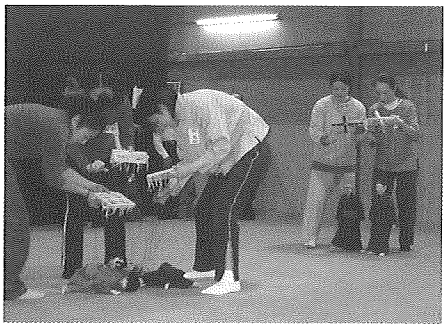
2・2～2・28　37～45回目

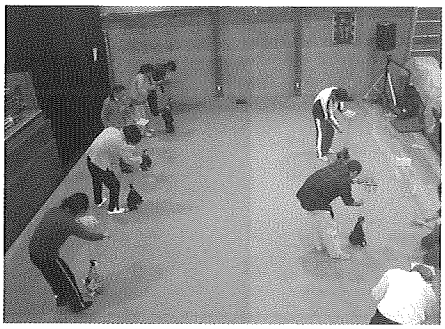
片足に体重をかけての片足飛び、両足飛び、軸足を決めて片足飛び、など飛ぶ稽古をする。三歩で180度の方向転換、お辞儀などを学ぶ。芝居をすることを意識した～歩いてきて・座って・両手を前について・お辞儀をする・立つ・向きを変える・去る～などの動きを自ら動機付けした流れを考えて遣う。『壺坂霊験記の口上』『橋弁慶』などを人形を持って云う。『釣女』の冒頭部分を太郎冠者と大名にわかれて演じる。

最終授業にて一人ずつ人形を遣って口上を述べることになったため、授業内だけでは追いつかず、自主的に早く来たり、居残り練習をする。（当初講師のいないところで稽古をすると、癖がついてしまう恐れがあったため、自主稽古は禁止だった）

3・2～3・7　46～48回目

生徒一人ずつ舞台に上がり発表会を行う。歩いてきて、所作台に上り、座って、お辞儀をしてから、口上を述べる。その後再びお辞儀をして、立ち上がり、去る。集団での稽古と違い、緊張してしまい、普段失敗しないようなところでも失敗をしている生徒もいれば、リラックスして堂々と演技出来た生徒もいた。失敗した生徒も気を取り直し最後までやり遂げた為、全員が一応の成果を上げたといえるでしょう。



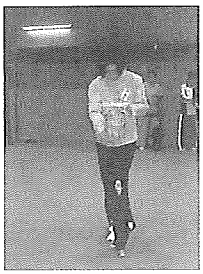


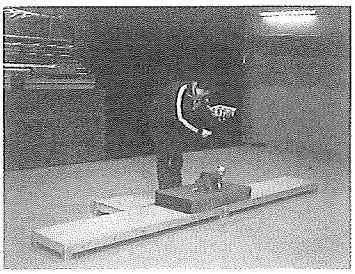
養成講座生徒の授業進捗

生徒A　55歳男性　身体の固さと年齢のせいか、人形実技、専門実技に対して終わり頃までかなり不器用だった。だが中盤以降は人形を遣う楽しさを理解し、生き生きとしてくる。

生徒B　25歳男性　最初は緊張して固くなっていて、言われたことに体が反応しなかったが、授業回数が進むにつれて、人形の遣い方が安定してきた。また他の授業でも慣れてきてからは着実にコツをのみこんで授業に取り組めるようになっていった。

生徒C　25歳女性　早い段階から人形を遣うことに対して、順調な伸びが見られた。コツを呑み込むのも早く、他の専門実技授業でも目立って進歩していた。





日舞授業　6回

西川鯉之祐先生

みんな古典の人形芝居を身につけたいという目的意識がはっきりしていて、やる気があってよかった。月1回で全6回と言うのは回数自体少なく間もあいてしまっていたので、せっかくやる気があって頑張っていたのにもったいない。早足で詰め込みになってしまったが、よく付いてきたと思う。もっと深く学んでいきたい人にとって、きっと力になると思う。ただいかんせん回数と期日が厳しかった。

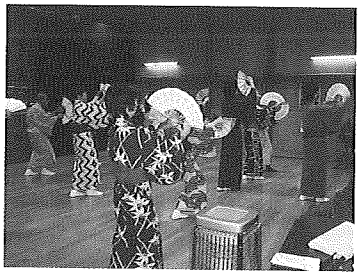
短い期間、少ない回数で一応は、基本の礼儀作法、所作、男と女形の違いの基本の部分を体得まで行かなくともわかってくれたと思う。

専門実技　授業のまとめ

日舞

日舞は一人を除いて始めての人ばかりでしたので、初歩から教えていただき、女の踊り「梅にも春」男の踊り「寿」を稽古しました。

初回10月20日（土）授業では、扇子の役割、歩き方(すり足)、座り方、首のふり方、礼の仕方、腰の落とし方などを指導。端唄の「梅にも春」を使って女の踊りを稽古しました。3回目の稽古で「梅にも春」のふりを一通り終え、曲全体を通してさらいました。その後「寿」にて男の踊りを稽古しました。4回目以降の授業では「梅にも春」「寿」を繰り返しさらい、曲と、動きを身体にさらに馴染ませました。6回目2月12日（土）の最終授業ではおさらいとともに2人もしくは3人ずつでみんなの前で踊り、簡単な発表会を行いました。



歌舞伎台詞授業　6回

澤村藤十郎先生

短い授業の回数の中でしたが、今回は義太夫狂言の入り口をかじってもらいました。勿論これだけでは、みんながこの『野崎村』を習得できたというわけではないけれど、義太夫狂言とはこう云うものなんだということだけは、伝えられた、わかってもらえたと思う。女形の遣り方も少しはわかったのではないだろうか。（全くの初心者に講義をするというのは）いろいろな意味で自分にとってもとても勉強になった。新しい見方でこの『野崎村』を見ることが出来るようになった。とても楽しかった。

今期は義太夫狂言を習いましたが、歌舞伎には黙阿弥調とか「～調」というのはたくさんあります。来年からはそれを少しずつ学ぶために是非岡本綺堂の『修善寺物語』をやりましょう。

歌舞伎台詞

初回9月29日（水）の授業で芸能の世界のしきたりについて、狂言、下座音楽、三代戯曲など様々な分野にまたがる芝居のお話を頂きました。またこの授業では結城座の古典演目の中から「野崎村」を取り上げ、歌舞伎台詞の言い回しと義太夫節の節回しについて勉強しました。10月6日（水）の授業では先生の出演された「野崎」のビデオを鑑賞し、その後、作品の見どころ、役の説明などを先生の実演とともにお聞きしました。11月6日（土）以降は野崎のビデオを部分的に流し、その部分のセリフを耳で覚え、一人ずつセリフを言ってみて、先生が直す、という形で進めていきました。最初は緊張して声が出なかった生徒さんたちも、回が進むにつれ、段々と声が出るようになり、歌舞伎（義太夫狂言）独得のセリフまわしを理解し、それらしく言えるようになってきました。

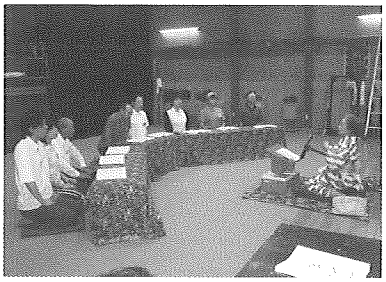
義太夫授業　6回

竹本素京先生

今回の授業は①人形遣いとしてセリフを言う際に必要な腹から声を出すことを身に付けさせる。②少しでも義太夫節に耳馴染んでもらう。③出来れば短いものを一本一人語れるようにする。を目標に実際に『橋弁慶』に取り組んでみた。最初は「声を出してみろ」といっても節回しがすぐには覚えられず、試演を聞いているだけで、これではいけないと思い、口上の稽古をしてみたら、みんな大きな声を出せるようになってよかった。当初の目標の②までは何とか達成できたのではないだろうか。本業としての稽古ではないので仕方が無いがそれにしても、回数が少ないし間が開きすぎでせっかく得たものを次の回には忘れてしまっている。耳覚え、口伝の義太夫の稽古は、現代に於いては難しいと実感した。テープに録って自主稽古の希望があったのを今回は敢えて却下しその場で集中して覚えるよう促したが、回数が少ない、間が開きすぎるという点を補足していくのに、使用OKにしても良いかもしれない。

初回9月22日の授業ではこの授業の教材となる「橋弁慶」を先生が語り、登場人物の心持なども含めて、物語に対する解説を頂きました。また三味線について・座って声を出す方法等について教えて頂きました。緊張のためか、又は正座に慣れていないせいなのか当初小さな声しか出せないようでした。9月27日（月）は説経浄瑠璃と義太夫の違い、竹本義太夫について、女義太夫界の隆盛などをお聞きし、「橋弁慶」の続きを稽古しました。11月1日（月）最初に「橋弁慶」の中の個々の詞（古語）の解説があり、前回までのおさらいと続きの稽古をしました。1月22日（土）「橋弁慶」の口上の稽古をしました。

また「壺坂霊験記」の観音様のセリフを稽古し、人間でも男でも女でもないもののセリフを言うことで「橋弁慶」（少年と男）との比較をしました。2月12日（土）先生の三味線にのせて生徒のみで語りました。



理論Ⅰ

菊池明先生

開講前は、受講者の芸能史にたいする基礎知識の程度が分らず、また年齢にばらつきがあり、限られた回数で、複雑な芸能の実態をどう伝えてよいか、ちょっと不安だったが、受講者はじつに純粋で、熱心、意欲十分なので、楽しく講義が出来た。とはいえ、広範囲にわたる内容を、この日数で全て理解徹底させることは難しい。ビデオなどの映像はたしかに有効ではあるが、今回はあえて使用しなかった。それは貴重な時間を映写で費やすより、まず出来るだけ講師の口から伝え、疑問の箇所は質疑応答とし、あとは知識の習得は受講者自身の意欲に任せようとしたからである。その代り、早稲田大学の演劇博物館を講師自身の解説付で見学したが、適切な質問も出て成果が上がったと思った。

今後の講座の課題としては、質問を多く受け、そこから受講者の理解、要望を汲み取り、話題が発展するようにすること、また古典の近代化のあり方を受講者とともに考えて見たいと思っている。

人形理論Ⅰ

9月25日（土）の初回授業には古代の日本人の人形観とその歴史についてを文献「傀儡子記」と現在古表神社などに残された実際の人形などからあわせて講義されました。10月3日（月）は日本と外国の演劇観の違い、中国の散楽が能楽へ移行していく過程、浄瑠璃の成立、三味線の伝来などについての講義。11月13日（土）は早稲田大学の演劇博物館に於いての博物館見学の出張講義となりました。演劇博物館にて古代・中世・近世・近代と続く演劇の流れを衣裳、模型や文献などに直接触れて勉強しました。12月20日（月）三大戯曲の１つである「忠臣蔵」の成り立ちを例に引いて史実、劇化、世話物と時代物の成り立ちの違いや江戸三座により季節季節で行われていた芝居についてなどを講義いただきました。2月5日（土）１年間を通しての歌舞伎の演目の季節感をお教えいただきました。また当時の狂言作者や台本の管理についてなども勉強しました。2月23日（水）明治以降の芝居について。明治維新後、歌舞伎や伝統芸能がどのような変革を行ったか、などをご教授いただきました。

理論Ⅱと人形実技授業のまとめ

結城孫三郎先生

平成16年、9月15日に開講。生徒は10人。年齢は、二十代から八十代まで…。当初のイメージでは、十代から五十代ぐらいと思っていたのだが、八十代の人が繰るとは、考えも及ばなかった。

稽古を始めるにあたって、この年齢差をどうして良いのか検討がつかぬ間に、第一回目の授業が始まってしまった。

初めは、手板（操作板）の持ち方から始まり、足の糸を引いたりゆるめたりの足踏みから始まったが、20分ほど動かしては、5分から10分の休憩を取り、また手板を持つという繰り返しであった。この状況下でも大半の人が、腕や肩の痛みを言って来た。これは、普段使わない筋肉を使用することもあるが、肩に力が入り、・・・リキミが出ていることが大きな原因であった。脱力を課題に、授業は進行していったが、この「脱力」の行為は、中々簡単なことではなく、生徒たちは全員苦戦していた。

十月に入って、交流基金の仕事でヨーロッパツアーが入り、劇団員全員が二十日余り日本を留守にした。この間、他の義太夫、歌舞伎の台詞、日本舞踊、演劇理論の諸先生方に授業をして頂いた。人形実技の時間が、ほぼ一ヶ月近く無かった事で、生徒たちの人形との関係は、全て元に戻っていた。これは、完全に身体に人形との関係性が染み付くには、長い時間がかかるものなので、仕方のない事に思えた。そんな中、生卵を持つ様に手板を持つ事から始まり足踏み等の練習が本格的に進行した。

約四ヶ月を過ぎる頃から段々個人差が出はじめた。若い人が、急激に進歩し始めたのである。しかし、年をとった生徒たちも必死についてきた。歩く、座る、頭（顔）を左右に動かす、チョイ（息遣い）の糸を出したり引いたり、障害物を渡る、飛ぶ、台詞を言いながら人形を動かす、方向転換する…6ヶ月の間で目一杯の人形の基礎訓練をやり続けた。技術的には、老若男女を問わず行きつ戻りつの繰り返しの中、稽古は続行された。手板のどこに何の糸がついているのか、そこからはじまった稽古は、終了時までに歩く、階段を一つ登り座る、お辞儀をして台詞を言う、立ち、歩くという複数の所作を入れるという卒業課題を目標に進んだ。

現実には、3、4年かかる所を6ヶ月という期間内でやらせたのだから、生徒たちにとっては、かなりハードな行為であったと思う。しかし、幸運な事に一人の脱落者も出さず、人形芝居とまでは行かなかったが、前期の卒業課題を口上という形で人形に言わせて終了とした。最も重要な、芝居を通して人形を遣うという最大の授業は、半年では余りにも日数が足りず大きな課題として残った。糸あやつり人形を広く一般の人々に教えるという講師という立場で、生徒たち一人一人が真摯に人形に立ち向かう姿に、静かな感動を覚えたのは私一人ではあるまい。日本の糸あやつり文化は確実に裾野を広げつつあると、確かな手応えを感じた第一期生終了日であった。

人形理論Ⅱ　授業内容まとめ

10月30（土）初回授業に於いては江戸糸あやつり人形の手板（操作板）の構造と進化の歴史や結城座の歴史、人形の地芝居に関してを講義いただきました。11月10日（水）古典の型（動き）とその成立過程それが現代の芝居にどう生きているのかを勉強しました。11月20日（土）人形の構造や材料、糸の結び方などの頭の構造などに関する講義。12月25日（土）析とつけ板についての構造と芝居における役割の説明の後、生徒さんが実際に析とつけ板を打つ稽古をしました。1月8日（土）写し絵（江戸時代の幻燈機）の歴史とその機能の説明、後半は実際に風呂（プロジェクターの名称）を持ち種板（フィルム）投影しました。2月19日（土）人形の胴に着物を着せて、糸のつけ方を学ぶ。手板の呼び糸に糸を通し調節の仕方を学ぶ基本的な糸の結び方にも挑戦しました。

半期終了後　アンケート

（11月回収）

・全てが初めてのことであり気持ちは充実してますが、全てが中途半端に半年を迎えるのでないかと危惧しています。記憶を頼りにおさらいをしていますが、間違ったまま練習している可能性が高いので不安です。特に専門の授業に関しては最低月に2回あればと思います。

・毎回発見があって楽しいです。教えていただく授業内容についても自分自身の身体性についても、毎回何か気付くことがあって嬉しいです。ただ人形以外の授業は間が長く空くことが多いので記憶を取り戻すのに時間がかかってしまいます。

・一流の講師陣に恵まれて直接に学習できることは本当にありがたいことです。糸あやつりの周辺の知識、技術を学ぶことも是非必要なことですので今後とも続けて欲しいです。

・どの授業も一流の方に指導していただけてとても幸せです。ただ身体で覚えなければならない義太夫、日舞、歌舞伎台詞などは月に1回の6回でどこまで出来るのかなと思います。でも、出来ないながらも、毎回、参加できるのが幸せです。理論Ⅰ、Ⅱとも楽しく参加しています。

・基本から、順次進めて、それこそ手取り足取りでご指導いただき、本当にありがたいことです。またマンツーマンで、その都度適切なご指導を頂き、とても有益な体験をしております。ただ身体になじませるためには、時間をかけて練習する必要がありそれぞれ工夫はして居ると思いますが、これについても適当な助言を頂くと有難いです。

・受講人数が少ないこともあってか、お互いに反省点とかコツとかの話を交わしています。授業についての不満はありませんが出来れば実際に自分で（一応）人形を作ったり手板を作ったりしながら学習する時間、（特別講義或はキャンプ）が作れたらいいな、と思います。講座が終ったあとでもいいですからそういうワイワイの時間、試行錯誤の時間も欲しいと思っております。

授業終了後回収アンケート

・とても楽しかったです。人形実技以外で学んだことが自分自身でまだまだ人形実技に生かせなかったと思うのが残念です。義太夫の授業などはなかなか覚えられず義太夫の難しさを実感しました。素晴らしい先生方に教えていただけて大変有意義でした。もっともっと自分自身が積極的に行動するべきだったと思いました。

・半年間があっという間でした。どの講義も中味がたっぷりで、いつも参加するのが楽しく、体調や、仕事などで欠席するのが、嫌でした。いろいろな意味で、自分と向き合う場（時間と空間）を頂いたと思います。今までは気にも止めなかった自分の身体と、はじめて向き合ったというような気がします。講師の方々そして結城座の方々には、感謝です。教えていただいても、何も出来るようにならなかった、自分は悲しいのですが、この自分を知ることが出来たのですから、ここからやっと動き出せるのだと思います。

・会社との両立が大変でしたが、なんとか続けてこられました。しかし半年ではやり残したことがあるような半端な気持ちになりもっと続けたかったと思っております。また声を出すことに慣れていないので、声を出す稽古を（個人的には）もっとやりたかったと思いました。自主稽古をぐっと短い時間でも集中して繰り返しやると、なにかつかめた様な気になることがありましたが、あまり自主稽古する時間が取れなくて残念でした。義太夫、歌舞伎台詞、演劇史等どれも大変濃く充実した授業でした。ただ半年はあまりにも短かったと感じました。

・幅広い年齢層の中で学ぶことが出来たのは貴重な体験でした。人形の授業では脱力すること、懐をあけること、フォーム、バランス感覚、手板の持ち方、糸の引き方、歩き方等先生方に繰り返しご指導いただきましたが、最後まで覚えきれず残念です。他の専門授業も大変楽しかったです。理論Ⅰでは一度行きたかった早稲田の演劇博物館に見学に行けたのがとてもうれしかったです。理論Ⅱでは人形の構造と糸の結び方の重要さがわかりました。日舞も義太夫も初めてでしたが良い経験でした。歌舞伎台詞も初めての経験でしたが、名前しか知らなかったお染久松についてや脚本の勉強も出来たいへん楽しかったです。

統　括

3月7日講師会議　日比谷松本楼にて
参加講師　澤村藤十郎、西川鯉之祐、結城孫三郎
平成16年度調査研究「伝統文化後継者養成調査」を全過程終了後、それぞれの分野での感想や意見を座談会形式で自由に語っていただきました。

本来はこういう芸事はマンツーマンで教わるのが普通なんですけど、他の人の稽古を見る・聴くのも大変勉強になりますね。だから一緒にたくさんの人が稽古をしたとしても、マンツーマンで教わるのとは違った部分の勉強をすることになると思う。ただどのような方式で教授するにしろ6ヶ月でやるのは（6回）は無理な話。まず6ヶ月だと慣れるのと基本稽古で終ってしまう。それに一月に一遍しか授業がないから、次の授業の時にはせっかく覚えたことも忘れきってしまう。せめて2週間にいっぺんだったら「ああ、あれはこうだったか」とふっと身体が思い出すのも早いのですね。特に身体を使って覚えるものですから、覚えたなあと思ってもすぐにお返ししてしまう。でも今回の皆さん方は半年間よく頑張りました。最初はどうしようかと思ったような人もいましたが、いろいろな授業を総合的にやっていたためか、後半になってぐんぐん伸びてきました。ただやはりもう少し全体の回数を増やしたいですね。それと例えば稽古をですね、人形、歌舞伎台詞、殺陣、踊り、鳴物を一つの劇場を借り切って（能楽堂とか）客席では台詞、舞台では殺陣をやって、楽屋では踊りとか同時にぐるぐる回してやってみるのはどうだろう。それぞれの芸事のつながりやなんかもわかるだろうし、徹底的に勉強するにはドップリ浸れるようにしたほうが良いかも。古典芸能を学ぶ場としていつか（実験的にでも）やってみたい。

来年一年間の目標としては最終的に発表会を行いたいと考えているんですよ。今まで半年間やってきた生徒さん（来期も参加希望の生徒9名）と来年度新入生（平成17年4月～平成18年3月の一年講習）の生徒さんを交えていっしょにやりたいな、と。その為に今度からはそれぞれの授業同士で連携を取って教えていった方が良いでしょう。人形、日舞、歌舞伎など方向を定めてやった方が学ぶほうにとっても効率的だろう。ただ人形に関していえば、半期で足踏み、歩く、座って、立って、首を動かすの基本訓練で半期終了してしまう。本当に古典らしいことを教え込むのは残りの半期の作業になるでしょう。踊りも同じで結局最初の6回く

らいは基本稽古なんですけどね。それでも踊りなら何も一段やらなくても良いし、例えさわりだけでも出来れば勉強になるでしょう。歌舞伎台詞も同じで、最初は慣れないせいかすごかったが、4回目を越す辺りから上手くなっていきました。皆さん段々とお上手になっていきました。ああやっぱりお稽古はするもんだなと思いました。やっぱりそうですよね、1回より2回、2回より3回、踊りもそうでしたね。

やはり今回もったいなかったなと思うのは一年間やればもっといろんなことが吸収できたのになあと思うことですね。ただこうやって（講師同士の）お話を聞いてみるとわかりますけど、芸才の有る無しはやはりありますね。多分御自分でわかってらっしゃると思うけど、台詞の才能の無い方は、踊るのも人形も駄目なんですよね。芸才が基本的にないということになるのでしょうか。好きなのと出来るのは違うものなんでしょうね。

（歌舞伎台詞を授業としてやるならば一緒に）鳴物の勉強も取り入れたらどうでしょう。実際には出来なくても音（下座音楽）を覚えるだけでも（歌舞伎台詞、踊りなどの）芸事を習得する助けになるだろう。ただ１年で修得するなんて無理。最低3年は必要。鳴物をやるなら3年先を見据えて養成するべきだと思います。もし今後この講座が続けられるとしたら授業として少しずつ取り入れて人を育ててゆきたい。授業をやるというのは自分にとっても頭のリフレッシュになる。忘れたことを授業をやるために思いだし、虫食いになっていた部分の記憶をどんどん思い出せる。

来年は歌舞伎台詞の授業で『修善寺物語』（作・岡本綺堂）をやりたいですね。人形やなんかもそれにあわせて授業にしたら面白いですね。そして最終の発表会は『修善寺』をやる方針で藤十郎先生にぜひ演出を手伝ってもらいたいですね。

この講座を半年間通して学んだことが彼らのこれからの人生に於いてどういう影響があるかわかりませんけど、古典芸能の世界を知る入り口として良い経験になったことは確かだと思います。今後どんどん続けていく人やここでおしまいの人、いろいろだと思いますが、みんな何らかのものを得たんだと思いますよ。この中で舞台に立つ人が出てくるといいよね。ただライトがあたって、まぶしくって前も見えないような時、その緊張に堪えられるか、それを心地よく感じること

が出来るようになるかは、まだまだ未知数ですけどね。（笑）

明日、実は人形の最後の授業なんです。生徒一人づつ、人形に口上を言わせて締めにしましょう、というまあ今期の最終発表会といったようなものをやるつもりでして。それは楽しみですね。（笑）いやあ、どうなることやら。（笑）みんなそれぞれ頑張ってくれるとは思いますけど。それこそ先生たちの（授業の）成果も出てくれるかと楽しみにしてます。

— 了 —

平成16年度調査研究「伝統文化後継者養成調査」に関し、各講師共通の問題としてご指摘いただいたのは、授業回数の少なさと授業と授業の間の間隔が開くことによる芸の取得の難しさでした。講師の先生御自身「マンツーマン方式」で芸を身に付けていらしたため、最初は授業という形態にはとまどいがあったようです。

ですが生徒自身のやる気と先生方の熱意により、初心者だった生徒たちが様々な古典芸能を学び、いまだ未熟とはいえ『江戸糸あやつり人形』という一つの芸に昇華されてゆきました。今回の講座を通して我々は『江戸糸あやつり人形』のみならず日本の伝統芸能の素晴らしさを教え、次代へ拡げてゆく目的を果たすことが出来たと確信しております。